

〈研究ノート〉

唐代の外交政策における「謀略」とその背景

菅 沼 愛 語

はじめに

通常は、諸国家の正規の政府間の交渉を外交というが、時には敵対する他国の非主流派や有力者との非公式な交渉（いわば「裏の外交（shadow diplomacy）」）が、敵国の弱体化などに有効な場合もあり、敵国の要人の謀殺などは、そのような「裏の外交」が歴史の表舞台に顕在化する好例とも言える。「謀略」は、成功したときには顕在化するが、失敗した場合には表には出ず、闇に葬り去られることも多いので、実際の成功例よりも多くの目に見えぬ失敗例があったと思われる。本稿では、唐の外交史の陰の側面、裏の外交という点に注目したいと思う。唐は、安史の乱（七五五～七六三年）が勃発する以前、隣接する強国（吐蕃や突厥など）の有力者、吐蕃の宰相ロンチンリン（論欽陵）、突厥第二可汗国の可汗默啜、吐蕃の將軍タグラコンロエ（悉諾邏恭祿）、契丹の衙官（副官）可突于を、「謀略」によって死に至らしめた。

唐が周辺国家に対して謀略を実施することができた理由として、以下の二点があげられる。

① システムの確立した中華王朝と違って、官僚機構が未発達な国家、特に新興国や遊牧国家は、政治的にも軍事的にも個人の力量に負うところが大きい。だからこそ、新興国や遊牧国家などにおいては、有能なリーダーの死が国家の命運や存亡を左右することも多い。それゆえ、暗殺や謀殺が有効に作用する。

② 中央集権化が進んでいない国家の場合、指導者層の間に大きな差がついていないことが多いので、謀略などによって指導者層の間に楔を打ち込むことが比較的容易である。その結果、謀略を受けた国家は、政治的にも軍事的にも指導者層の一体性が損なわれ、徐々に弱体化していくこともある。

以上の二点により、謀略という手段は、近隣諸国に対して実施する場合には有効な方法であるが、中央集権化がかなり進んだ正常な状態の中華王朝においては、あまり効力を発揮しない。官僚機構がある程度発達していれば、個人よりも集団として機能が発達するので、一個人を排除しても、多くの場合、大勢には影響がないからである。つまり、まともな状態の中華帝国、唐代でいえば、安史の乱以前の中国に対しては、謀略は有効な手段ではなかった。加えて、謀略には一定の

工作資金が必要であるため、通常は豊富な資金力を有する中華王朝から周辺国家に対して一方向的に行われたと考えられる。

しかし、安史の乱以降、唐も軍事的・経済的に著しく弱体化した上に、反側藩鎮が皇帝や王を僭称して叛旗を翻したため、皇帝の相対的地位は下落してしまった。また、唐の支配者の層も薄くなったので、個人が背負う責務や影響力も重くなり、將軍が謀略のターゲットとして狙われる場合もあった。

こうして、安史の乱後になると、弱体化した唐が逆に周辺国家から謀略をしかけられるケースも起こってくる。本稿では、唐が吐蕃によつてしかけられた「平涼偽盟」（貞元三〇七八七）を謀略の例として取り上げたいと思う。

本稿は、二章で構成される。第一章で、唐が行った周辺国家の要人達の謀殺を取り上げ、第二章では、吐蕃が唐にしかけた謀略、「平涼偽盟」を取り上げる。

また、唐が謀殺したと思われる周辺国家の四人の要人（ロンチンリン、默啜、タグラコンロエ、可突于）については〔表〕、唐による周辺国家の要人（ロンチンリン、默啜、タグラコンロエ、可突于）の謀殺と、彼らの謀殺前後の対外的な状況については〔年表1〕、平涼偽盟前後の情勢については〔年表2〕に各々まとめたので、随時参照されたい。

一、七世紀末～八世紀前半（安史の乱以前）、唐による周辺国家の要人の謀殺

七世紀後半、唐は西域の支配権をめぐって吐蕃と対戦したが、四度

も大敗し、太宗時代からの対外膨張に歯止めがかかった。更に、永淳元年（六八二）、モンゴリアに突厥（第二可汗国）が復興し、その後、契丹や渤海も勢力圏に置き、北方の脅威となったため、唐は、七世紀末から西の吐蕃、北の突厥という二つの難敵に対応せざるを得なくなった。このため唐は東西二正面作戦の回避を意識し、外交を重要視するようになった。七世紀末～八世紀前半（安史の乱以前）、唐は軍事的な交渉のみならず、多様な外交を展開するようになったが、そういった外交の副産物として「謀殺」という手段を用いて、敵対する吐蕃の宰相ロンチンリン、突厥可汗の默啜、吐蕃の將軍タグラコンロエ、契丹の衙官（副官）可突于を抹殺していった。

ロンチンリン（論欽陵）は吐蕃の名将・名宰相であり、七世紀後半、自ら吐蕃軍を指揮して幾度か唐軍を撃破し、唐を大いに苦しめたが、六九八年（聖暦元）、チンリンの専横を憎む吐蕃王チ・ドゥーソンによつて肅清された。

默啜は、突厥第二可汗国の二代目の可汗であり、再興した突厥をまとめ、七世紀末～八世紀初め、自ら出撃しては、たびたび唐を苦しめた。唐は和戦両様で默啜に対応したが、突厥の猛攻を食い止めることができなかったため、懸賞金をかけて默啜の殺害を促した。その結果、開元四年（七一六）、默啜はバヤルク族の兵士（頡質略）によつて襲撃・殺害され、首級は玄宗に献上された。

タグラコンロエ（悉諾邏恭祿）は吐蕃の名将であり、開元十五年（七二七）、瓜州（甘肅省）を大々的に襲撃し、唐に甚大な損害を与えたので、唐は吐蕃に工作員を派遣すると、タグラコンロエが唐と通謀していると吹聴した。すると吐蕃王チデツクツェンは唐の流した偽情

〔年表 1〕 唐による周辺国家の要人（ロンチンリン、黙啜、タグラコンロエ、可突于）の謀殺と、彼らが謀殺される前後の唐との対戦状況

年代	出 来 事
670 (咸亨元)	4月、吐蕃軍が亀茲にある唐の安西都護府を襲撃【第一次唐・吐蕃戦争の勃発】 7月～8月、大非川の戦いでロンチンリン率いる吐蕃軍が唐軍を撃破
677 (儀鳳2)	吐蕃と西突厥の阿史那都支が連合して安西都護府を襲撃【第二次唐・吐蕃戦争の勃発】
678 (儀鳳3)	9月、青海付近の戦いで、ロンチンリン率いる吐蕃軍が唐軍18万を撃破
685	吐蕃の宰相ツェンニャ（ロンチンリンの長兄）が死去し、ロンチンリンが宰相位を継承
687	吐蕃が安西四鎮を奪取【第三次唐・吐蕃戦争の勃発】
689	7月 第三次唐・吐蕃戦争での前半の決戦、寅識迦河の戦いで吐蕃軍が唐軍を撃破
692	10月、唐軍が吐蕃軍を撃破し、四鎮を奪還
694 (延載元)	2月、唐軍が、吐蕃軍（ロンチンリンの末弟グントンが指揮）と西突厥の阿史那倭子の連合軍を撃破
695 (天冊万歳元)	7月 ロンチンリンの率いる吐蕃軍が臨洮に入寇 冬、ロンチンリンの末弟グントンが、吐蕃王チ＝ドゥーソンによって処刑される
696 (万歳通天元)	3月、第三次唐・吐蕃戦争の最終決戦、素羅汗山の戦いにおいて、ロンチンリン率いる吐蕃軍が唐軍を撃破。 5月、契丹の反乱（李尽忠・孫万榮の乱）が勃発 8月、唐の派遣した契丹討伐軍が、契丹軍に敗北 9月、吐蕃の宰相ロンチンリンが法外な条件で唐に和睦を提案
698 (聖暦元)	ロンチンリンらガルー族が、吐蕃王チ＝ドゥーソンにより粛清される この頃、則天武后が、黙啜を斬った者を王に封じるとの勅書を下す
699 (聖暦2)	ロンチンリンの弟ツェンワ（賛婆）と、ロンチンリンの息子論弓仁が、唐に亡命。則天武后は彼らを受け入れ、官職を授けて厚遇
706 (神龍2)	12月、突厥が、靈州・原州・会州を襲撃 12月、中宗が勅書を下し、黙啜の殺害者、捕縛者への官職授与等の褒賞を約束
716 (開元4)	6月、黙啜がバヤルク遠征の帰途、バヤルクの敗残兵顔質略に襲撃されて殺され、首級は玄宗に献上される その後、突厥でクーデターが勃発し、ビルゲ（黙啜の甥）が即位。契丹などが突厥から離反し、唐に帰順
720 (開元8)	契丹で衛官の可突于が反乱を起こす。可突于是唐軍を撃破し、契丹王の李娑固と奚王の李大酺を殺害。可突于是、李鬱于を契丹王に推戴し、玄宗もこれを認めたので、乱は終息
727 (開元15)	9月、タグラコンロエの率いる吐蕃軍が瓜州（甘肅省）を攻撃 閏9月、吐蕃が突騎施と連合して安西都護府を襲撃
728 (開元16)	吐蕃王チデツクツェンが、唐の間諜が流した偽情報（タグラコンロエが唐と通謀）を信じ、タグラコンロエを誅殺
730 (開元18)	5月、可突于が再度反乱を起こし、親唐の契丹王李召固を殺害し、突厥に帰順 6月頃、可突于が平盧（營州）を襲撃するが、唐軍はこれを撃退
732 (開元20)	3月、幽州北山の戦い： 契丹・奚・突厥連合軍 対 唐軍⇒契丹・突厥連合の敗北
733 (開元21)	閏3月、榆関都山の戦い： 契丹・突厥・渤海連合軍 対 唐軍⇒唐軍の敗北
734 (開元22)	4月、唐軍が契丹軍を撃破 12月、唐軍が契丹軍を再度撃破。可突于是唐に降伏するが、その後も突厥との連繫を図ったため、唐は李過折（可突于と兵馬の権を分掌、可突于と不和）に可突于を誅殺させる
755～763	「安史の乱」
787 (貞元3)	閏5月、「平涼偽盟」で、唐の使節や将兵が吐蕃軍によって殺害もしくは捕縛される

報を信じ、タグラコンロエを誅殺した。

可突于は、契丹の衙官（副官）で、政治・軍事・外交において才能を発揮したが、大変な野心家であり、親唐の契丹王を殺害すると、突厥の支援を得て唐に刃向い、開元二十一年（七三三）には突厥・渤海と連合して唐軍を撃破した。そこで唐は、可突于とライバル関係にあった契丹人（李過折）に対して可突于の殺害を命じ、これを葬った。唐によるロンチンリン、黙啜、タグラコンロエ、可突于の謀殺については、『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』『冊府元龜』などの諸史料に基づいて考察した。なお、ロンチンリンの謀殺に関しては佐藤長氏の優れた研究⁽³⁾があり、本稿でも一部これを参考にした。

（1）吐蕃の宰相ロンチンリン（論欽陵）——唐がしかけた離間工作——

チベット語の吐蕃年代記によれば、吐蕃の宰相ロンチンリンは、六九八年（聖暦元）、吐蕃王チ・ドゥーソンによって肅清されたが、佐藤長氏は『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』などの漢文史料も活用し、唐による離間政策が引き金になってチンリンが肅清されたことを指摘している。本節は、佐藤氏の研究成果を踏まえて、『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』などの漢文史料やチベット語史料に基づき、ロンチンリンの活躍と、その歴史的意義を含めて、チンリンが謀殺されるに至った背景と、その経緯を見ていきたいと思う。

ロンチンリンは、七世紀中葉、吐蕃の宰相をつとめたガル・トンツェン（禄東賛）の次男で、咸亨元年（六七〇）七月～八月の大非川の戦い、儀鳳三年（六七八）九月の青海付近の戦いにおいて各々唐軍を撃破した名将であり、垂拱元年（六八五）、宰相であった長兄ツェンニヤ（賛悉若）が亡くなると、そのあとを継いで宰相となった。⁽⁵⁾

吐蕃では、英主のソンツェン・ガムボ王が死去（貞観二十三年＝六四九年）した後、マンソン・マンツェン⁽⁶⁾（十三歳で即位）、チ・ドゥーソン（八歳で即位）といった年若い王が相次いだため、宰相家のガル一族が吐蕃の政治・軍事・外交を掌握し、王に代って吐蕃を主導した。ガル一族は積極的な対外拡張策を推し進め、唐との対決も辞さず、龍朔三年（六六三）、唐の傀儡国家と化していた青海の吐谷渾を攻め滅ぼすと、唐の支配下にあった疏勒、于闐なども襲撃し、唐の西域支配を脅かした。その際、ロンチンリンは先述のように將軍として吐蕃軍を指揮し、大非川の戦い（六七〇）と青海付近の戦い（六七八）で唐軍を打ち破った。吐蕃軍との戦いで唐軍が大敗したことも要因の一つとなって、新羅や突厥遺民の自立活動が促され、新羅は咸亨元年（六七二）より唐への独立戦争（唐・新羅戦争（六七二～六七六年））を開始し、突厥遺民は調露元年（六七九）より唐に叛旗を翻し、永淳元年（六八二）に国家（突厥第二可汗国）を再興したと考えられる。⁽⁷⁾ ロンチンリンは、大唐帝国の構築した世界支配に対し、決定的な打撃を与えたともいえる。それゆえ、唐にとってチンリンは畏怖すべき強敵であり、生かしてはおけない存在であったといえよう。

しかし、吐蕃の青年王チ・ドゥーソンは、長年にわたるガル一族の専権に対し、強い不満を抱いていた。チ・ドゥーソンは、儀鳳元年（六七六）の即位時には八歳の少年にすぎず、ガル一族の支配に従うしかなかったが、六九〇年代には成年に達し、親政を渴望した。このため、延載元年（六九四）、チンリンの末弟グントン（勃論賛刃）が唐軍に敗北した時、チ・ドゥーソンは、敗北の責任を負わせてグントンを処刑した⁽⁸⁾（六九五＝天冊万歳元）。このときロンチンリンは出撃

中であり、證聖元年（六九五）天冊万歳元）七月、臨洮（甘肅省）を攻撃していた（『新唐書』卷二一六吐蕃伝、『資治通鑑』卷二〇五）。チ・ドゥーソンはチンリンの不在も好機と判断し、ガル家に攻撃をしかけてきたのであった。

なお、吐蕃軍は長寿元年（六九二）にも王孝傑率いる唐軍に敗北していた。このとき勝利した唐は、吐蕃の手から安西四鎮を奪還すると、三万の駐屯軍を配備して防衛を強化し、吐蕃の侵攻に備えた（『旧唐書』卷一九八龜茲伝、『資治通鑑』卷二〇五）。

ロンチンリンにとって、唐による四鎮奪還（六九二）と吐蕃王によるグントン処刑（六九五）は痛烈な痛手であり、これによりチンリンは唐と吐蕃本国の腹背に敵を受けることとなった。

こうした悪状況を一気に打開するために、ロンチンリンは自ら出陣すると、万歳通天元年（六九六）三月、素羅汗山の戦いで唐軍を撃破した。その後、同年九月に涼州を襲撃し、再度唐に打撃を与えると、使者を派遣して和睦を提案し、「唐は安西四鎮から兵を引き揚げ、十姓の地（西突厥の地）を分割せよ」との条件を則天武后に提示した。ロンチンリンの狙いは、素羅汗山の戦いで獲得した勝利を生かし、有利な条件で唐と和睦し、失った安西四鎮を取り戻すことであった。

唐にとってロンチンリンの提示する和睦の条件は、とうてい受諾できる内容ではなかったが、さりとて武力に訴えてチンリンの要求を封じ込めることもできなかった。唐は、チンリン相手の戦いで少なくとも三度大敗しており、戦闘で事を決することは容易ではなかった。更に、唐では万歳通天元年（六九六）五月、東の営州（遼寧省）で契丹の反乱が勃発し、唐の派遣した大規模な契丹討伐軍も同年八月、契丹

〔表〕唐が謀殺したと思われる周辺国家の要人（ロンチンリン、黙啜、タグラコンロエ、可突于）

名前	ステータス	唐に与えた打撃・脅威など	唐による謀殺方法	史料
ロンチンリン 論欽陵	吐蕃の将軍、 685年より 吐蕃の宰相	西域の覇権を巡って唐と争奪戦を繰り広げ、少なくとも2度（670年、678年）吐蕃軍を指揮して唐軍を撃破し、安西都護府、安西四鎮等を幾度か占領。万歳通天元年（696）素羅汗山の戦いで唐軍を撃破後、唐に対し「安西四鎮からの撤退と西突厥の地の分割」を要求	唐は吐蕃に対し、青海と、西突厥の五俟斤部の地の交換を提案。チンリンはこの条件を受諾できず、和睦交渉は頓挫する。不安定な停戦は吐蕃の内訌を促し、宰相家ガル一族による長年の専権を憎んでいた吐蕃王チ・ドゥーソンは、チンリンらガル一族を肅清	『旧』 97郭元振伝、196吐蕃伝、 『新』 216吐蕃伝、 『通』 205、206
黙啜	突厥第二可汗国の2代目可汗	契丹の反乱を鎮圧する過程で勢力拡大。唐の北辺（靈州・勝州・定州等）、西方の北庭等を襲撃し、唐に甚大な打撃を与えた。唐は、和戦両様で黙啜に対応したが、黙啜の猛攻を挫くことはできず	則天武后、中宗、玄宗は代々、黙啜の殺害者・捕縛者に対し褒賞を約束。開元4年（716）6月、バヤルクの敗残兵・顔質略が、遠征帰途の黙啜を襲撃・殺害し、首級を唐に献上して、玄宗から拔曳固都督・稽離郡王・左武徳大將軍に取り立てられる	『旧』 7中宗紀、194突厥伝、 『新』 215突厥伝、 『通』 211、 『冊』 986、992
タグラ コンロエ 悉諾邏恭祿	吐蕃の将軍	開元15年（727）9月、瓜州（甘肅省）を襲撃。瓜州刺史の田元猷を捕え、唐の軍需品や兵糧をすべて奪い、瓜州城を破壊して、唐側に甚大な損傷を与えた	河西節度使の蕭嵩が、反間の工作員を吐蕃に送り込み「タグラコンロエは唐と密かに通謀している」との偽情報を伝えたため、吐蕃王チデツクツェンはこれを信じ、タグラコンロエを誅殺	『旧』『新』 吐蕃伝、 『通』 213、 『冊』 411
可突于	契丹の衛官（副官）	開元8年（720）と開元18年（730）に親唐の契丹王に叛き、王を殺害。開元20～21年（732～733）、突厥の援軍を得て唐と対戦し、開元21年には唐軍を撃破	開元22年（734）4月と12月、唐軍に敗北したため、偽って唐に降伏したが、唐に帰順後も突厥との連繫を画策したため、唐は李過折（可突于と兵馬の権を分掌）に対し、可突于の誅殺を命令	『旧』 199契丹伝、 『新』 219契丹伝、 『通』 214

※ 『旧』 = 『旧唐書』、『新』 = 『新唐書』、『通』 = 『資治通鑑』、『冊』 = 『冊府元龜』

に大敗した(『旧唐書』卷一九九契丹伝、『新唐書』卷二一九契丹伝、『資治通鑑』卷二〇五)。東方でも敗北した唐には、西に吐蕃討伐軍を繰り出せるだけの余裕はなかったのである。

唐は、ロンチンリンの提案に対し、即座に決議することができなかったが、和睦の条件に付いてチンリンと会談した郭元振は、チンリンの弱点も見抜いており、則天武后に対し、以下のような進言を行った。

『資治通鑑』卷二〇五万歲通天元年九月条、『旧唐書』卷九七郭元振伝、『新唐書』卷二二六吐蕃伝などから郭元振の進言を要約すると、次の二点にまとめられる。⁽¹²⁾①唐はチンリンに対し、「東侵(=中国への入寇)の意志がないのであれば、唐に吐谷渾の諸部と青海の故地を返還せよ。さすれば、唐は吐蕃に西突厥の五俟斤部落(五弩失畢部=碎葉〔スイアープ〕以西)を返還しよう」と、返答するとよい。これによってチンリンを黙らせることができ、なおかつ吐蕃との関係も絶たずにおける。もしチンリンが少しでも背けば、罪はチンリンにあることになる⁽¹³⁾。②吐蕃人は長期の戦争に倦み疲れており、みな和平を願っている。もし、唐が毎年吐蕃に使者を派遣して和睦を呼びかけても、チンリンがこれに応じなければ、吐蕃人はチンリンを怨み、唐の温情を望むようになる。吐蕃人同士が猜疑し合うようになれば、内乱が勃発する可能性もある。

この郭元振の進言に、当時の吐蕃の国情やロンチンリンの置かれた国内外の情勢などを加味し、以下に補足説明する。吐谷渾の故地、青海は、吐蕃にとっては軍事上・経済上の要衝であった。とりわけチンリンにとって、青海は父親のガル・トンツェン(禄東賛)が攻略・占領した重要拠点であるため、同地への思い入れは強く、「吐谷渾の諸

部と青海の故地の唐への譲渡」は受諾しがたい条件であった。更に、吐蕃王チ・ドゥーソンが天冊万歲元年(六九五)、チンリンの末弟グントンを処刑し、ガル一族に対する攻撃を開始しており、吐蕃国内でのチンリンの立場は困難なものになっていた。それゆえ、これ以上、唐との戦争状態が続けば、ガル一族に対する吐蕃人の不満は爆発するであろう、というのが郭元振の予測であった。

則天武后は、謀略によってロンチンリンを抹殺すればよい、との郭元振の提言に賛同すると、チンリンの提案する和睦条件を認めず、吐蕃とは不安定な停戦状態を維持した。⁽¹⁴⁾すると、郭元振の予測通り、吐蕃では内訌が生じ、六九八年(聖暦元)⁽¹⁵⁾、チ・ドゥーソンが自ら軍を率いてロンチンリンを討伐した。このためロンチンリンは自殺し、チンリンの親族や党人二千餘人が殺害された(『旧唐書』卷一九六吐蕃伝、『資治通鑑』卷二〇六聖暦二年夏四月条)。

なお、『資治通鑑』卷二〇二調露元年(六七九)二月壬戌条によれば、吐蕃王マンソン・マンツェンが死去し、八歳の息子チ・ドゥーソンが即位した時、高宗は將軍の裴行儉に対し、この間隙に乗じて吐蕃に謀略をしかけるよう命令したが、裴行儉は、「吐蕃ではロンチンリンが政務を執り、大臣達は結束しておりますので、謀略をしかけるべきではありません」と言って反対した。このように唐は十年前にも吐蕃への謀略を画策したが、吐蕃側の結束が強いので断念したのである。しかし、王と宰相の対立が激化し、内訌の勃発が現実的になったため、唐は吐蕃への離間策を実行に移したと考えられる。

ロンチンリンをはじめとするガル一族は、こうして吐蕃王の手により、ほぼ肅清されたが、チンリンの弟ツェンワ(贊婆)、チンリンの

息子論弓仁は、肅清を逃れ、聖暦二年（六九九）、唐に亡命した。⁽¹⁶⁾ 則天武后は亡命者達を受け入れ、ツェンワを特進帰德王に封じ、弓仁には左玉鈴衛將軍・酒泉郡公を授けた（『資治通鑑』卷二〇六聖暦二年夏四月条、『新唐書』卷一一〇論弓仁伝）。弓仁の任地となる酒泉（甘肅省）がある河西地方には、吐蕃が頻繁に侵攻するので、武后は弓仁を河西の要衝に置いて吐蕃への防衛戦に活用する計画だったのである。ツェンワは唐に亡命後ほどなく死去した（『旧唐書』吐蕃伝）が、弓仁は、吐蕃で宰相を「ロン」と呼ぶことに因んで「論」を姓とし、子孫も論の姓を名のって代々唐王朝に仕えた。

弓仁は、その後、玄宗にも仕え、対突厥戦などで活躍した後、開元十一年（七二三）六十歳で死去した。⁽¹⁷⁾ 弓仁の孫、論惟貞は、安史の乱の時、李光弼の指揮下で決死隊を率い、史思明軍を撃破した（『新唐書』卷一一〇論惟貞伝）。また、論惟明（弓仁の孫、惟貞の弟）は、建中四年（七八三）十月、朱泚の乱が勃発すると、長安から逃亡する徳宗に付き従って奉天（陝西省乾県）に赴き、朱泚軍が奉天を包囲した時には奮闘し（『旧唐書』卷十二徳宗紀上、『資治通鑑』卷二二八建中四年十月丁巳条）、貞元三年（七八七）、死去した（『旧唐書』卷十二徳宗紀上）。

以上のように唐は懐深くロンチンリンの親族を受け入れているが、唐側の意図は、彼らの能力を吐蕃攻略に利用することにあつたと推察される。チンリンの弟や息子ならば気骨もあり、軍事的才幹も拔き出ているはずであり、唐の尖兵として活躍が期待できる上に、彼らは吐蕃王を憎んでいるので、唐への忠義心も揺るぎないと判断したのであろう。事実、チンリンの子孫は秀でた軍才や忠誠心によって唐王朝

に仕え、国難の際、唐のために力闘した。

なお、ガル一族肅清後の長安二年（七〇二）、チ・ドゥーソンは自ら出撃して悉州（四川省）を攻撃するなど、政治・軍事の表舞台で活躍することを好んだ。吐蕃の南境で諸族が反乱を起こした時も、チ・ドゥーソンは自ら軍勢を率いて反乱分子の討伐に赴いたが、長安四年（七〇四）、南蛮諸族との戦闘で討ち死にした（『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝）。チ・ドゥーソンは、ガル一族の手から国政を取り戻し、名実を伴った王者として吐蕃に力強く君臨する心意気だったが、蛮勇が災いし、死期を早めてしまったのである。

チ・ドゥーソンの遺児チデツクツェンは、まだ七歳と幼かったため、吐蕃は唐に遣使して和を求め、会盟の締結と公主の降嫁を請願した（『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝）。⁽¹⁹⁾ 中宗は吐蕃側の要請に応じ、神龍二年（七〇六）、吐蕃と会盟（神龍会盟）を締結して和睦し、景龍四年（七一〇）正月、金城公主（中宗の次兄章懷太子李賢の息子・雍王守礼の娘で、中宗の養女）を降嫁させ、両国の間に一時的に和平が成立したが、やがて吐蕃は公主の化粧料（河西九曲）を前進基地となして唐への侵攻を再開し、唐との間で、河西・隴右や西域の支配権をめぐる再び激突することとなる。

（2）突厥可汗、默啜―則天武后・中宗・玄宗が設けた懸賞制度―

開元四年（七二六）六月、バヤルク（拔曳固、拔野古）の兵士、顔質略が、突厥可汗の默啜を殺害し、その首級を唐に献上した（『旧唐書』卷一九四突厥伝、『新唐書』卷二二五突厥伝、『資治通鑑』卷二二一開元四年六月癸酉条）。默啜は、自ら北方のバヤルクに遠征し、北モンゴリアの独楽河（トラ河）で大勝利を収めたが、勝利に酔い、警

戒心を緩め、軽装備で帰還していたところ、敗残のバヤルク兵、頡質略が柳林の中から急襲し、黙啜を斬殺したのであった。

黙啜の急死により、それまで突厥に服属していたバヤルク、ウイグル、同羅、僕固、契丹、奚などの諸族は突厥を見限り、唐に帰順した。また、突厥ではクーデターが勃発し、黙啜の甥キョル・テギン（闕特勤）が、黙啜の息子や黙啜派の幹部らを殺害し、兄のビルゲ（毗伽）を可汗に擁立した。こうした突厥の混乱や政情不安を好機と見た唐は、突厥の支配下から唐に寝返った諸族も動員して大規模な北伐軍を編成し、突厥に対する大攻勢を計画する。

突厥の混乱の引き金となった黙啜の横死も、唐が仕向けた謀略が契機になった。実際、則天武后、中宗、玄宗が代々、黙啜の捕縛者、被害者に対し、官職授与などの褒賞を約束しており、黙啜を殺害したバヤルク族の頡質略が、唐に黙啜の首を献上し、褒賞を獲得しているからである。唐皇帝が黙啜の首に懸賞をかけたことが、黙啜殺害の一つの要因になったのは確実であろう。

突厥第二可汗国の二代目可汗、黙啜（在位は天授二年〔六九一〕～開元四年〔七一六〕）は、万歲通天元年（六九六）五月に勃発した契丹の反乱を鎮圧する過程で強大化し、唐を北から圧迫した。黙啜は、靈州（寧夏回族自治区）、勝州（山西省）、蔚州（河北省）など唐の北辺の諸都市を次々に襲撃すると、更に西方にも遠征して北庭（ビシュバリク）を二年連続で襲撃するなど、その攻勢はとどまるところを知らなかった。黙啜の猛攻に対し、唐は武力による断固たる反撃を実行する一方で、官職授与、冊立、婚姻政策などの怀柔策も併用して黙啜の鋭鋒を挫こうと腐心したが、唐が融和政策を試みると黙啜はかえっ

て増長し、和睦のために突厥を訪問した唐の使者を拘束するなどの暴挙を行った⁽²⁰⁾（『旧唐書』卷一九四突厥伝、『新唐書』卷二一五突厥伝、『資治通鑑』卷二〇五、卷二〇六）。

このため唐は、黙啜に対し、あらゆる手段を講じて対応すべきとの必要性を認識し、則天武后、中宗、玄宗が代々、褒賞を約して黙啜の捕縛・殺害を促した。

匈奴、突厥、ウイグル、モンゴルなど北方の遊牧民族政権において、勇猛さはリーダーが備えるべき重要な資質であると見なされ、単于や可汗は果断に陣頭で指揮をとることが多かった。また、遊牧国家においては、政治的にも軍事的にもリーダーの才覚が国家の存亡に大きな影響を及ぼしたので、有能なリーダーの死が国の衰退に繋がることも少なくなかった。黙啜も武勇を重んじ、自ら出撃して突厥を隆盛へと導いていた。それゆえ唐も、出撃する機会の多い黙啜ならば、これを狙撃できる確率も高いこと、黙啜の死が突厥の衰亡に繋がることなどを予測し、懸賞を設けて黙啜の捕縛・殺害を促したと考えられる。

以下に、武后、中宗、玄宗が設けた懸賞について取り上げる。

（a）則天武后の懸賞

聖暦元年（六九八）、黙啜が定州（河北省）を襲撃し、刺史の孫彦高を殺害し、男女を捕虜とし、老若を問わず住民を殺害すると、則天武后は激怒し、「黙啜を斬ったものは王に取り立てる」との布令を出した⁽²¹⁾。黙啜が定州を襲撃した時期は聖暦元年（六九八）八月であるので（『旧唐書』卷六則天皇后紀）、武后が黙啜の被害者に対して懸賞を約したのは、聖暦元年（六九八）八月以降であったと推測される。

(b) 中宗の懸賞

中宗も、默啜の猛攻に苦慮した。神龍二年（七〇六）十二月、突厥軍が靈州・原州（以上寧夏回族自治区）・会州（甘肅省）を襲撃したため、中宗は、同十二月、布令を出すと、默啜の殺害者・捕縛者に対し、王への取り立て、官職の授与、賞物の下賜などの褒賞を約束した。⁽²²⁾

中宗は、翌年（景龍元年＝七〇七）正月にも、群臣に対して突厥平定策の上奏を命令し、対突厥戦に備えて猛士を募集した。また、景龍二年（七〇八）、北辺に突厥防衛のための要塞、三受降城を構築し、突騎施・キルギスと反突厥連合を締結するなど、相次いで突厥対策を実施している。なお、中宗は、神龍二年（七〇六）、吐蕃と会盟（神龍会盟）を行った。吐蕃との和平により西方戦線が終息し、北方戦線への兵力集中が可能となったため、中宗は、神龍二年十二月より本格的に突厥への反撃を計画し、默啜の殺害者・捕縛者に対しても褒賞を約し、突厥対策に万全を期したと考えられる。⁽²³⁾

(c) 玄宗の懸賞と默啜の殺害者に対する褒賞

玄宗もまた、則天武后と中宗の懸賞制度を継承し、默啜の捕縛者に褒賞を約束した。⁽²⁴⁾

默啜は、開元四年（七一六）六月、バヤルク遠征の帰途、バヤルクの敗残兵・頡質略によつて急襲され、殺害された。頡質略は默啜の首級を携えると、このとき突厥に来ていた唐の大武軍（山西省代県北）の部将、郝靈儉（郝靈佺・郝靈奎）に帰順し、默啜の首級を長安にもたらしした。その後、默啜の首は、長安の広街で晒された（『旧唐書』『新唐書』突厥伝、『資治通鑑』卷二二一）。

玄宗は、默啜の殺害者・頡質略に対し、褒賞として拔曳固都督・稽

維郡王等の位を授け、開元六年（七一八）、頡質略を横野軍討撃大使に任命して北方戦線に配属し（『冊府元龜』卷九八六外臣部征討五、『冊府元龜』卷九九二外臣部備禦五）、北方情勢に詳しい頡質略を突厥攻略に活用した。玄宗はまた、郝靈儉にも褒賞を授けようとしたが、郝靈儉が自分の功を不世出の功績であると自慢したので、宰相の宋璟は、玄宗が武功を好むことや、恩賞目当ての者が続出することなどを危惧し、郝靈儉への褒美を抑え、郎將の位しか与えなかった。このため郝靈儉は悲しみ、慟哭して死んだ（『資治通鑑』卷二二一）。

以上のように、唐の歴代皇帝、則天武后、中宗、玄宗が、懸賞制度を設けて諸族に圧力をかけたことなどが、默啜殺害の契機になったと考えられる。

(3) 吐蕃の將軍タグラコンロエ（悉諾邏恭祿）——唐の流した偽情報

唐は、開元十六年（七二八）、謀略を用い、吐蕃の將軍タグラコンロエ（悉諾邏恭祿）を吐蕃王チデツクツエンに誅殺させた。タグラコンロエの謀殺については、『旧唐書』卷一九六吐蕃伝、『新唐書』卷二一六吐蕃伝、『資治通鑑』卷二二三、『冊府元龜』卷四一一などに見える。⁽²⁵⁾ 諸史料を挙げつつ、以下にタグラコンロエ謀殺の状況を見る。

タグラコンロエは、開元十五年（七二七）九月、瓜州（甘肅省）を襲撃すると、瓜州刺史の田元献を捕縛し、城内に蓄えられていた唐の軍需品や食糧などをすべて奪取したのち、瓜州城を破壊して、唐に甚大な損害を与えた。吐蕃軍は瓜州での勝利に勢いづき、玉門軍と常楽軍（ともに甘肅省）を襲撃した。この攻撃は唐側に撃退されたが、吐蕃軍は、同年閏九月にも突騎施と連合して龜茲の安西城を包囲した（『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二二三開元十五年条）。

タグラコンロエは、この勝利によって威光と名声を高め、大論（大宰相）に昇格し、吐蕃の軍事と政治を掌握した（『旧唐書』吐蕃伝）⁽²⁶⁾。

なお、吐蕃は瓜州攻撃にあたり、突厥のビルゲ（毗伽）可汗に書状を送って瓜州挟撃を提案した（『旧唐書』突厥伝、『資治通鑑』卷二二三）。ビルゲがこれを拒絶したため、吐蕃と突厥の連繫は実現しなかったが、もし瓜州攻撃に突厥軍も参戦していたら、唐の被害は更に拡大していたであろう。また、吐蕃は安西都護府を襲撃する際には突騎施と連合した。タグラコンロエはこのように、軍才に長けていただけでなく、外交的な手腕にも秀でた將軍であった。このため、唐はタグラコンロエを危険視したと思われる。

河西節度使の蕭嵩は、反間のための工作員を吐蕃に放つと、「タグラコンロエは密かに唐と通謀している」と言わせた。吐蕃王チデツクツェンは、唐の間諜が流した偽情報信じ、タグラコンロエを召し寄せると、これを誅殺した（『旧唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二二三開元十五年条、『冊府元龜』卷四一一將帥部間諜・蕭嵩）。

タグラコンロエが誅殺された時期は、チベット語の吐蕃年代記、龍の年（七二八）の条によれば、開元十六年（七二八）の冬であった⁽²⁸⁾。

また、『資治通鑑』卷二二三は、タグラコンロエの死後、吐蕃の勢いが衰えたとして記している。実際、吐蕃は、開元十六年―開元十七年（七二九）、河西・隴右などで相次いで唐軍に敗北し、重要な軍事拠点を奪われたため、開元十八年（七三〇）、唐に遣使して和睦を請願した⁽²⁹⁾（『旧唐書』吐蕃伝）。

以上のように、唐は謀略により、吐蕃の名將タグラコンロエを吐蕃王に殺させ、吐蕃軍の鋭鋒を挫いて戦いを有利に進めると、遂に吐蕃

を屈服させたのである。

（4）契丹の衙官（副官）可突于―唐の暗殺指令―

契丹は、唐と突厥の狭間に位置する要衝であったため両国の争奪の的となったが、神功元年（六九七）以降は突厥の支配下に属した。だが、開元四年（七一六）、可汗默啜の死を契機に、契丹は突厥を見限り、唐に帰順した。契丹の衙官・可突于是、優れた政治力、軍才、外交力を有し、契丹人からの人望も篤かったので、玄宗も信任し、可突于に突厥への備えを期待した。しかし、可突于是野心家であったため、親唐の契丹王と対立し、開元八年（七二〇）と開元十八年（七三〇）、二度も反乱を起こして契丹王らを弑殺すると、唐の支配に抗戦した⁽³⁰⁾（『旧唐書』卷一九九契丹伝、『新唐書』卷二一九契丹伝）。

可突于是、契丹の帰属をめぐる唐と突厥の対立も巧みに利用し、開元十八年の反乱の時には突厥に帰順し、ビルゲ可汗から支援を得て唐と対戦した。可突于是、開元二十年（七三二）三月、幽州北山の戦いで、ビルゲ可汗の援軍と共に唐軍と対戦したが敗北した。しかし、開元二十一年（七三三）閏三月の榆関都山の戦いで、可突于是、ビルゲ可汗自身が率いる突厥軍、渤海からの援軍とも連合し、唐軍を大いに打ち破った。唐側は、総司令官の郭英傑を筆頭に、六千餘とも一万ともいわれる將兵が戦死した⁽³¹⁾（『旧唐書』契丹伝、『資治通鑑』卷二二三）。

敗北した唐は、各個撃破で契丹・突厥・渤海連合に対応し、ビルゲ可汗に対しては公主の降嫁を許可して懐柔し、渤海対策については新羅に任せ、新羅に渤海討伐を命令した⁽³²⁾。このため突厥と渤海は契丹の支援を止め、孤軍となった可突于是、開元二十二年（七三四）の四月

と十二月、単独で唐の名將張守珪と対戦した。だが、二度とも唐軍に敗北したため、可突于は抗戦を断念し、張守珪に降伏した。

張守珪は、寛大に可突于の降伏を認めたが、可突于是、その後も突厥との通謀を画策した。このため、張守珪の管記王悔は、可突于と共に兵馬の権を掌握していた李過折に対し、可突于の殺害を命じた。李過折は可突于と不仲だったので、王悔は李過折を利用し、可突于の抹殺を図ったのである。李過折は唐の指令に従い、可突于と彼の推戴する契丹王屈烈、可突于の支持者数十人を襲撃し、殺害した。可突于の首級は洛陽に送られ、天津橋で晒された。玄宗は、李過折の功を嘉し、北平郡王に封じ、特進檢校松漠州都督の官職も授けると、錦衣、銀器、絹綵三千疋などを褒美として下賜した（『旧唐書』『新唐書』契丹伝、『資治通鑑』卷二二四）。

こうして唐は、ライバル関係にあった李過折に可突于を誅殺させたが、李過折もまた、可突于の残党泥禮によって殺害された。しかし、玄宗は泥禮を赦し、松漠都督に任命した（『旧唐書』『新唐書』契丹伝）。開元二十三年（七三五）、突厥の登利可汗が契丹に侵攻した時、玄宗は泥禮に対し、張守珪と連繫して応戦するよう命じ、泥禮も唐軍の先鋒となって突厥軍を撃破した。⁽³³⁾唐にとっては突厥軍の撃退が重要であったため、泥禮を懐柔して活用し、泥禮も唐への忠義心を示すため力戦したのであろう。

（5）まとめ

以上が、七世紀末から八世紀前半（安史の乱以前）⁽³⁴⁾に、唐が周辺国家の宰相、將軍などに対して行った謀略の次第であるが、共通して見られる点は、唐が、同国人もしくは服属民に謀殺を実行させていると

ころである。こうすることにより、唐は怒りや憎悪の矛先を暗殺者へと逸らすことが可能となり、暗殺者は同国人から憎悪されて国内で孤立し、その国が一つにまとまり難くなるという効果が期待できた。唐にとっては、結束して対抗されることが最も厄介であるので、周辺国家、それも吐蕃や突厥など唐にとって危険な強国に対しては、疑心暗鬼を煽り、内訌の芽を燦らせておくことが肝要であった。唐にとっての邪魔者や危険人物を始末させ、且つ内紛の火種も残すという、一石二鳥の方法である。

また、唐は、亡命者（ロンチンリンの弟ツェンワや息子の論弓仁）や暗殺の実行者（黙啜の殺害者・頡質略）を武將として採用し、前線に投入した。論弓仁は吐蕃との戦いの要衝となる河西の酒泉に赴任させ、頡質略は北方攻略に動員した。彼らの特性を利用し、吐蕃や突厥の攻略を有利に進めようと画策したのである。

二、安史の乱後、吐蕃が唐にしかけた外交上の謀略「平涼偽盟」

面白いことに、安史の乱後になると、弱体化した唐の方が逆に周辺国家によって謀略をしかけられるというケースも見られるようになる。その例として、吐蕃がしかけた謀略、「平涼偽盟」を本章では取り上げる。

平涼偽盟は、貞元三年（七八七）閏五月、平涼（甘肅省）で開催された唐・吐蕃会盟に参加した唐側の使節や將兵が、吐蕃軍の襲撃を受け、殺害あるいは捕縛された事件である。⁽³⁵⁾この偽盟は、吐蕃の宰相尚結贊（シャンギェルツェン）が計画した。第一節で、平涼偽盟に至る

までの唐・吐蕃関係、唐の国内外の情勢などを概観し、第二節で、平涼偽盟を含む吐蕃側の謀略を見る。

(1) 平涼偽盟に至る唐の内憂（藩鎮の乱）と二つの唐・吐蕃会盟

（建中会盟・奉天盟書）

安史の乱（七五五～七六三年）が終息した後も、唐の国内には反側藩鎮が存在し、唐の国内には内乱の火種が残った。一方、吐蕃は安史の乱の時、唐が河西・隴右の軍勢を安祿山討伐のために東方に移動させた隙を衝いて同地を軍事占領し、乱後も河西・隴右の実効支配を続行した。徳宗（七七九～八〇五年）は、国内情勢の安定化を優先し、外患の緩和を期して吐蕃との和睦を試みた。しかし、徳宗が急進的な藩鎮抑圧政策を実施したため、建中二年（七八一）、李惟岳（成徳節度使・李宝臣の遺児）、田悦（魏博節度使）、李正己（平盧節度使）、梁崇義（山南東道節度使）が連合して叛旗を翻した。この反乱は一旦は沈静化に向かったが、建中三年（七八二）、朱滔（盧龍節度使）、王武俊（成徳節度使）、田悦（魏博節度使）、李納（平盧節度使）が反乱を起し、各々が王を僭称し、李希烈（淮西節度使）も蜂起したため、唐は更に追い詰められた。このように国内情勢が不穏であったのと対照的に、唐と吐蕃の和睦交渉は順調に進んだ。徳宗は、内乱に対応するため、吐蕃側の要求する国境劃定や敵国の礼の適用も承諾し、建中四年（七八三）、清水（甘肅省）、長安、ラサで各々会盟（建中会盟）を行った。この建中会盟により、唐は吐蕃による河西・隴右の実効支配を正式に承認し、境界碑の立石や国境侵犯の禁止などを決定し、大きな譲歩にも甘んじて吐蕃との和平を実現させた。

ところが、建中四年（七八三）十月、長安で朱泚の乱が勃発したた

め、徳宗は難を避け、奉天（陝西省乾県）に逃亡した。このとき徳宗は吐蕃に助力を乞い、「奉天盟書」を与え、安西四鎮・北庭の割譲と毎年絹一万匹の下賜を条件に、吐蕃に援軍の派遣と長安の奪還を請願した。吐蕃の宰相尚結贊は、徳宗の申し出に応じて派兵し、興元元年（七八四）四月、唐の將軍渾瑊と連合して朱泚軍を撃破した。しかし、朱泚が吐蕃軍の参戦に脅威を感じ、尚結贊に金帛（黄金と絹）を贈ると、尚結贊は朱泚の賄賂を受け取って撤退した。

その後、唐は独力で長安を奪還したが、吐蕃の背信行為に不信感を抱き、吐蕃の約束不履行を口実として、奉天盟書の約定のうち、安西四鎮と北庭の吐蕃への割譲を中止した。すると尚結贊は激怒し、建中会盟で決まった国境地点を侵犯すると、貞元二年（七八六）八月、涇州、寧州（以上甘肅省）、隴州、邠州（以上陝西省）を大々的に襲撃し、九月、十一月、十二月にも、塩州、夏州、銀州、麟州（以上陝西省等）など唐の西北辺を波状攻撃した。³⁶⁾

(2) 平涼偽盟を含む吐蕃側の謀略

貞元二年（七八六）八月以降の吐蕃軍の相次ぐ猛攻に対し、唐では吐蕃への対応策をめぐり、和睦か、それとも対戦かで意見が割れ、主戦派と和平派にわかれて対立した。主戦派は、西北辺の防衛を担う前線將軍（李晟、韓遊瓌）や宰相の韓滉であった。前線將軍達は対吐蕃戦を指揮する関係から戦争続行を主張し、韓滉は、吐蕃が大食（アラブ）・ウイグル・南詔に兵力を分散していること、河西・隴右に駐屯する吐蕃軍は五～六万程度であることなど、吐蕃側の実情を分析した上で、いまこそが吐蕃軍を撃退できる好機であると主張した。徳宗もまた、吐蕃との和睦には反対していた（『旧唐書』卷一二九韓滉伝、

『資治通鑑』卷二二二。

一方の吐蕃は、この頃、西方戦線で大食の軍勢と対戦中であつたため、唐との戦いに兵力を集中することができなかつた。⁽³⁷⁾その上、吐蕃軍の陣地では羊馬が死亡し、戦闘の続行が難しくなつたため、尚結賛は謀略によつて唐にダメージを与えようと、偽盟を計画したのである。唐側が和平派と主戦派の間で意見対立していることも、尚結賛には謀略をしかける好機に映つたと思われる。

尚結賛は、建中四年（七八三）正月、清水で唐の張鎰と会盟を行い、朱泚の乱が勃発した時には徳宗に対して援軍の派遣を申し出、興元元年（七八四）四月、唐の將軍渾瑊と連合して朱泚軍を撃退するなど、唐と行動を共にする機会も多く、唐の内情に通じていたため、唐王朝内部の権力闘争も察知したと考えられる。

尚結賛の目的の一つは、唐の三人の將軍、李晟、渾瑊、馬燧を失脚させることであつた（『旧唐書』卷二三三李晟伝、『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝）。この三將軍は、いずれも唐の名將であり、吐蕃にとつては脅威であつたが、なかでも尚結賛にとつて手強かつたのは、西北辺の防衛を担当する鳳翔隴右節度使の李晟であつた。李晟は頑強な主戦論者であり、尚結賛も貞元二年（七八六）九月、李晟の部下王伾との戦いに敗北し、捕虜になつた。このため尚結賛は李晟を最も警戒し、離間策をしかけて李晟の失脚を画策したこともあつたが、これにも失敗していた（『資治通鑑』卷二二二）。

しかし、李晟は宰相の張延賞や將軍の馬燧と不仲であつたため、尚結賛は彼らの不和を利用し、馬燧に賄賂を贈つて懐柔すると、貞元三年（七八七）三月、徳宗に対して吐蕃と和睦するよう進言させた。折

〔年表2〕「平涼偽盟」前後の情勢

年代	出来事
建中2 (781)	李惟岳（成徳節度使李宝臣の遺児）が、田悦（魏博節度使）・李正己（平盧節度使）・梁崇義（山南東道節度使）と連合して反乱
建中3 (782)	朱滔（盧龍）、王武俊（成徳）、田悦（盧龍）、李納（平盧）が連合し再度反乱。11月、朱滔、王武俊、田悦、李納が各々王を自称。淮西節度使の李希烈も蜂起
建中4 (783)	正月、唐と吐蕃が清水で会盟【建中会盟：清水会盟】 7月、唐と吐蕃が長安とラサでも会盟【建中会盟：長安での会盟、ラサでの会盟】 10月、長安で「朱泚の乱」が勃発し、徳宗は奉天に逃亡
興元元 (784)	正月、吐蕃の尚結賛が朱泚討伐を請願したため、徳宗は吐蕃に出撃を命令 【783年10月～784年正月、徳宗は吐蕃に「奉天盟書」を与え、援軍の派遣と長安の奪還を要請】 4月、唐の將軍渾瑊と吐蕃軍が連合し、武功の武亭川で朱泚軍を撃破 5月、吐蕃が朱泚の賄賂を受け取り撤退 5月、唐軍が単独で長安を奪回【朱泚の乱が終息】
貞元2 (786)	8月、吐蕃軍が涇州・隴州・邠州・寧州を襲撃 9月、吐蕃軍が好畤を攻撃 11月、吐蕃軍が塩州を占領 12月、吐蕃軍が夏州・銀州・麟州を占領
貞元3 (787)	3月、馬燧が吐蕃の論頰熱を伴って入朝し、徳宗に吐蕃との会盟を進言 3月、徳宗が李晟から兵権を剥奪 3月～4月、唐と尚結賛が会盟のための事前交渉を行う 閏5月、平涼で唐と吐蕃が会盟【平涼偽盟】 6月、徳宗が馬燧から兵権を剥奪

しも、唐では、貞元三年（七八七）二月に、李晟を支持する宰相韓滉が病死し、李晟と対立する宰相張延賞の発言力が強まった（『旧唐書』卷一二九韓滉伝、張延賞伝、『資治通鑑』卷二二二）。張延賞は、李晟と対立する関係からも吐蕃との和睦を主張した。こうして和平論者の勢が増すなか、馬燧が吐蕃の使者論煩熱を伴って入朝し、和睦を言した。このため、当初は吐蕃との和睦に反対していた徳宗も、心動かされ、吐蕃との会盟を決断した。その後、徳宗は張延賞の進言も採用し、吐蕃との和睦の妨げになるとの理由で、李晟から兵馬の権を剥奪した（『資治通鑑』卷二二三）。かくして、尚結賛は唐側の内訌も巧みに利用し、徳宗に吐蕃との会盟を承知させ、李晟から兵権を剥奪することにも成功したのである。

尚結賛は、貞元三年（七八七）三月～四月、唐の使者と会談し、会盟の日程や場所について相談したが、その際、吐蕃軍が占領している塩州と夏州を唐に返還することを申し出、唐側の警戒心を解くことにつとめた。また、尚結賛は、將軍の渾瑊を会盟に参加させるよう要請した。渾瑊は、尚結賛が排斥を目論む唐の三將軍の一人であったので、会盟に誘き出し、渾瑊の捕縛を画策したのである。徳宗が尚結賛の請願を許したため、渾瑊が盟会使に任命され、吐蕃との会盟に出席することが決まった。すると、尚結賛は靈州節度使の杜希全と涇原節度使の李観も会盟に参加させるよう要求したが、徳宗は、これについては許可しなかった。杜希全と李観は西北辺の防衛を担当していたので、尚結賛は兩人も会盟の場で捕縛し、指揮官が不在となった靈州と涇原を各々占領し、更に長安にも攻めのぼって、再度、唐の都を占領する計画まで立てていたのである（『旧唐書』卷一三四渾瑊伝、『旧唐書』

『新唐書』吐蕃伝）。

一方、唐の將軍の中には、吐蕃との会盟が決定後も、依然として会盟を吐蕃側の謀略ではないかと疑うものもいた。⁽³⁸⁾特に李晟は吐蕃側の謀略を懸念し、盟会使の渾瑊に対して、会盟の場では備えを嚴重にするよう忠告した。だが、張延賞が李晟の助言は和睦の妨げとなる恐れがあると徳宗に告げたため、徳宗は渾瑊に対し、「吐蕃に対しては誠実に対応せよ。猜疑心を抱いて吐蕃の感情を損なってはならない」と言って戒めた。このため渾瑊は徳宗の命令に従って吐蕃の謀略を疑わず、華州節度使の駱元光が、「吐蕃の情勢には偽りが多いので、將軍に同行し、陣地を築いて危急に備えたい」と申し出た時にも、徳宗の詔を理由にこれを断った（『旧唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二二三）。渾瑊は、会盟の場に軍隊を伴えば吐蕃人に不信任を抱かせることになると懸念したのであろう。しかし、渾瑊が徳宗の命令に従い、吐蕃への疑心を捨てて会盟に臨んだことがかえって仇となり、渾瑊ら唐の使節団は平涼で吐蕃軍に襲撃されることとなるのである。⁽³⁹⁾

貞元三年（七八七）閏五月、平涼偽盟の時、武將の渾瑊はいち早く異変を察し、馬に乗って単身逃走することができたが、その他の唐の使節六十餘名は吐蕃軍の捕虜となり、四～五百人の將兵や人夫が殺害され、千餘人が捕縛された⁽⁴⁰⁾（『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝）。このようにして、会盟の名を借りた吐蕃軍の奇襲攻撃は成功を収めたのであった。

尚結賛は、当初の計画では渾瑊を捕え、金の鎖で縛って吐蕃王に献上する心づもりであったため、渾瑊を取り逃がしたことを悔やんだ。だが、尚結賛は抜け目なく、平涼偽盟の時に生け捕りにした唐の使節達

を利用して馬燧の失脚を画策した。即ち、尚結贊は、捕虜にした馬弁（馬燧の甥）、馬寧（渾城の部下）、俱文珍（宦官）を引見すると、吐蕃軍が鳴沙に駐屯しているとき、馬燧が攻撃をして来なかったので全滅せずにすんだこと、馬燧の支援によって徳宗に和睦を請願できたこと、いま吐蕃の全軍が無事に帰国できるのは馬燧のお陰であることなどを意図的に告げた後、釈放したのである。馬弁ら三名が長安に帰還後、尚結贊の言葉を徳宗に伝えたため、徳宗は馬燧を憎み、偽盟での失態の責任を負わせると、貞元三年（七八七）六月、馬燧から兵権を剥奪した（『旧唐書』卷二三四馬燧伝、『資治通鑑』卷二二二）。

（3）まとめ

このように、尚結贊は、ほぼ計画通りに警戒する唐の三將軍のうち李晟と馬燧を失脚させたが、その際、唐側の不協和音も巧妙に利用し、賄賂で和平派を懐柔して謀略を成功させた。これも、安史の乱後の唐の弱体化を如実に反映した事象の一つと言えるだろう。

国家が逼迫した状況下においては、和平派と主戦派の対立は非常にシビアになる。安史の乱以前の唐にとっては、和平か戦争かという問題は、極論すれば単なる選択の問題であり、いわば外交のオプションの一つにすぎなかった。しかし、安史の乱後、国内に反側藩鎮が跋扈し、国外には吐蕃・ウイグルの強国がひかえる危機的情勢のもとでは、吐蕃と和睦するか、それとも戦うかという問題は、唐にとっては生き残りをかけた国家の最重要課題の一つとなり、和平派と主戦派の対立は、より鋭くならざるを得なかった。そして、そこに付け入る隙が生じ、吐蕃に介入する余地を与えたのである。

おわりに

以上、本稿で見たように、安史の乱以前、謀略は唐から周辺国家に対して一方向的に行われたが、安史の乱後、唐が弱体化すると立場は逆転し、唐の方が周辺国家から謀略をしかけられるようになる。

安史の乱以前の唐は、勢力を張って四囲に君臨し、吐蕃や突厥などの手強い周辺国家に対しても、軍事的圧力に加え、外交戦略の一環として謀略により敵国の指導者層の対立を促し、吐蕃の宰相・將軍や突厥の可汗らを抹殺していった。外交戦略によって敵国の内紛を煽るという構図は、例えば、前漢の武帝以降の対匈奴戦略にも見られる。前漢は、匈奴の兄弟争いに干渉し、匈奴を分裂させて勢力を削いだ。戦争という危険な方法を取ることなく、謀略によって敵国の内訌を助長し、かつて強大だった匈奴を弱体化させた。

しかし、安史の乱以後、唐は内憂外患に苦慮するようになり、対外政策をめぐって和平派と主戦派が鋭く対立し、吐蕃に干渉する隙を与えてしまう。和平派と主戦派の反目に、外敵が水面下で関与するという構図は、国家の危機的状況において、しばしば見られる現象である。例えば、南宋初期の、和平派の秦檜と主戦派の岳飛の対立、及び、その前後の金の暗躍などもそうである。最初は抗金派だった秦檜は、金に拘束されたのち懐柔され、和平論者として南宋に送り込まれ、名将岳飛を抹殺した。金は、軍事的な攻勢のかたわら、混乱する南宋の政局に裏から介入し、結果的には謀略によって南宋の主戦派を無力化したとも言えるだろう。

本稿で扱った「謀略」は、これまで、その性格上、学術的な研究は

あまりなされてこなかった題材であるが、厳然たる事実として、世界史上多く用いられ、ときには歴史を大きく変えたこともある。また、その歴史的背景は、各国の政情や軍事などと密接に結びついており、歪んだ外交の一形態としての謀略も含めた多様な外交関係の解明は、歴史研究としても興味深いテーマではないだろうか。

註

- (1) 菅沼愛語・菅沼秀夫「七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシア諸国の自立への動き―新羅の朝鮮半島統一・突厥の復興・契丹の反乱・渤海の建国との関連性」(『史窓』第六六号、二〇〇九年)、拙著『七世紀後半から八世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移―唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に』(溪水社、二〇一三年)第一章「七世紀後半の東部ユーラシア諸国の自立への動き」を参照。
- (2) 拙著註(1)前掲書第二章「八世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢」、拙稿「八世紀前半の唐・突厥・吐蕃を中心とする国際情勢―多様な外交関係の形成とその展開」(『史窓』第六七号、二〇一〇年)を参照。
- (3) 佐藤長「古代チベット史研究」上巻(東洋史研究会、一九五八年)。
- (4) 拙稿註(1)前掲論文、拙著註(1)前掲書第一章を参照。
- (5) 佐藤註(3)前掲書、森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」(『金沢大学文学部論集・史学科篇』第四号、一九八四年)を参照。
- (6) マンソン・マンツェンの即位時の年齢については、佐藤註(3)前掲書二一〇頁参照。チ・ドゥーソンは、『資治通鑑』卷二〇二によれば、即位時八歳であった。佐藤註(3)前掲書三三五頁、三八二頁註三三参照。
- (7) 拙稿註(1)前掲論文、拙著註(1)前掲書第一章参照。
- (8) グントンの処刑については佐藤註(3)前掲書三五八―三五九頁を参照。

- (9) 『資治通鑑』卷二〇五、『旧唐書』卷五九許欽明伝などは、涼州の襲撃者を突厥と記す。王小甫氏(『唐吐蕃大食政治関係史』北京大学出版社、一九九二年、一三三頁)は、吐蕃と突厥が連合して涼州を襲撃したと考察している。
- (10) 七世紀後半、唐は吐蕃との戦いで四度大敗した。そのうち三つの戦い(大非川の戦い(六七〇年)、青海付近の戦い(六七八年)、素羅汗山の戦い(六九六年))で、吐蕃軍を指揮したのがロンチンリンであることは明らかであるが、寅識迦河の戦い(六八九年)の時の吐蕃軍の指揮官の名は史書に明記されていない。拙稿註(1)前掲論文、拙著註(1)前掲書第一章を参照。
- (11) 素羅汗山の戦いで唐軍が大敗したことも、契丹の反乱の契機になったと考えられる。拙稿註(1)前掲論文、拙著註(1)前掲書第一章を参照。
- (12) 佐藤註(3)前掲書三六三―三六五頁。
- (13) 長寿元年(六九二)の二月と六月、吐蕃から唐への亡命者(吐蕃の酋長骨咄・党項・生羌)が相次いで到来しており(『資治通鑑』卷二〇五)、こうした亡命者達からも、唐は吐蕃の国情に関する情報を得ていたと思われる。長年にわたる戦争に対する疲弊や嫌悪、ガル家との確執などが、彼らが唐に亡命した理由であろう。
- (14) 佐藤註(3)前掲書三六四頁参照。
- (15) 佐藤長氏(佐藤註(3)前掲書三六五頁)は、チベット語の吐蕃年代記「犬の年(六九八年)の条」にガル家が処罰されたこと、年代記の「豚の年(六九九年)の条」にガル家の財産が没収されたことが各々記されていることから、ガル一族の肅清の時期を六九八年(犬の年、聖暦元)と考証している。本稿も佐藤氏の考察に従う。
- (16) 洛陽で出土した禄賛薩邏の墓誌銘によれば、ロンチンリンの息子禄賛薩邏が、チ・ドゥーソンによるガル一族の肅清(聖暦元二六九八)以前の垂拱年間の初め(六八五年)頃、吐蕃での政争が原因で唐に亡命している。禄賛薩邏は唐王朝に仕えた後、垂拱四年(六八八)、三十三歳で死去している。『隋唐五代墓誌匯編』洛陽卷第六冊(天津古籍出版社、一九九一年)、李宗俊「唐禄賛薩邏墓志考釈」

- (17) 『民族研究』二〇一〇年第三期。
 (17) 論弓仁の没年と享年については、張燕公集 卷十九「撥川郡王碑奉勅撰」で、開元十一年に六十歳で死去したと記されている。『新唐書』論弓仁伝では、六十六歳で死去したと記す。
 (18) 唐で活躍した論弓仁の子孫については、佐藤註(3) 前掲書三七一―三七二頁、才讓『吐蕃史稿』(甘肅人民出版社、二〇〇七年) 一〇一―一〇五頁も参照。
 (19) 拙著註(1) 前掲書第3章「安史の乱以前の2つの唐・吐蕃会盟」、拙稿「唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義―安史の乱以前の二度の会盟を中心に」(『日本西蔵学会々報』第五十六号、二〇一〇年) 参照。
 (20) 默啜については、護雅夫「突厥と隋・唐兩王朝」(『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社、一九六七年)、護雅夫「古代遊牧帝國」(中央公論社、一九七六年)、内藤みどり「突厥カプガン可汗の北庭攻撃」(『東洋學報』第七六卷第三・四合併号、一九九五年)、金子修一「則天武后治政下の国際関係に関する覚書」(『唐代史研究』第六号、二〇〇三年) を参照。なお最近、斎藤茂雄氏はチベット語史料も活用し、默啜死後の突厥の内訌を論考している。斎藤「突厥第二可汗国の内部対立―古チベット語文書(p.1283) にみえるブグ Chol (Bug-chol) を手がかりに」(『史学雑誌』一二二編九号、二〇一二年)。
 (21) 『旧唐書』卷一九四突厥伝に「(默啜) 俄進攻定州、殺刺史孫彦高、焚燒百姓廬舍、虜掠男女、無少長皆殺之。則天大怒、購斬默啜者封王、改默啜号为斬默啜。」とある。
 (22) 『旧唐書』卷七中宗紀に「(神龍二年十二月) 甲申、募能斬默啜者、封授諸大衛大將軍。〔神龍二年(七〇六) 十二月、中宗は、默啜を斬殺できたものには諸大衛大將軍の位を授けるとの勅書を下した。〕」、『旧唐書』突厥伝に「中宗下制……仍購募能斬獲默啜者封國王、授諸衛大將軍、賞物二千段。〔中宗は勅書を下すと……默啜を斬殺するか捕縛することのできたものを王に封じ、諸衛大將軍の職を授け、二千段の賞を与える事を約した。〕」とある。
- (23) 中宗が、神龍二年(七〇六)、吐蕃と神龍会盟を締結した後、次いで突厥政策を実行したことについては、拙著註(1) 前掲書第2章第3章、拙稿註(2) 論文を参照。
 (24) 『資治通鑑』卷二一「開元四年六月条が引用する『玄宗實錄』によれば、「七月戊寅、詔書與降附突厥云、乘其衰弱、早就剪除、其能捉獲默啜者、已立賞格。〔開元四年(七一六) 七月戊寅、玄宗は降伏した突厥人に勅書を下して言った。突厥の衰微に乘じ、速やかにこれを平定せよ。默啜を捕縛することができたものに對しては、すでに褒美を与えた。〕」とある。
 (25) 例えば『旧唐書』吐蕃伝に「時悉諾邏恭祿威名甚振、蕭嵩乃縱反間於吐蕃、云其與中国潜通、贊普遂召而誅之。」とある。
 (26) タグラコンロエが瓜州攻撃の功績によつて大論(大宰相) に昇格したことは、チベット語史料(編年記、年代記の兔の年(七二七) の条) に記載がある。佐藤註(3) 前掲書四五二頁。
 (27) ビルゲ(毗伽) 可汗は、開元十五年(七二七) 九月、大臣の梅録啜を唐に派遣すると、吐蕃の密書(瓜州挾撃を提案) を献上し、玄宗から褒美として西受降城で毎年絹馬交易を行なう許可を得た(『資治通鑑』卷二三)。ビルゲは、①唐による軍事的・外交的な圧迫に追い詰められた、②唐との絹馬交易が魅力的だった、③唐の防衛体制が堅固なため吐蕃との連繋が困難だった、などの理由により、唐との和睦を決定したと考えられる。拙著註(1) 前掲書第2章、拙稿註(2) 前掲論文を参照。
 (28) 佐藤註(3) 前掲書四五六―四五七頁。
 (29) 唐は開元十五年(七二七)、突厥のビルゲ可汗と和睦した(註27 参照)。唐は、突厥との和睦によつて北方戦線を憂慮する必要のなくなったことも幸いし、開元十六年(七二八)―開元十七年(七二九)、西方戦線での吐蕃との戦いに兵力を集中することができたと考えられる。また、唐と吐蕃は、開元十八年(七三〇) より和睦交渉を行うと、会盟(開元会盟) を締結し、国境の劃定、境界碑(赤嶺碑文) の建碑、国境侵犯の禁止などを約し、開元二十六年(七三八) の戦争再開まで休戦状態となった。拙著註(1) 前掲書第2章

第3章、拙稿註(2)論文、拙稿註(19)論文を参照。

- (30) 唐代の契丹については、田村実造「唐代に於ける契丹族の研究」(『満蒙史論叢』第一巻、日滿文化協会、一九三八年)、田村実造『中国征服王朝の研究』上巻(東洋史研究会、一九六四年)、愛宕松男『契丹古代史の研究』(東洋史研究会、一九五九年)、契丹をめぐる唐と突厥の対立、可突于の動向については、拙著註(1)前掲書第4章「唐と突厥第二可汗国の和戦」、拙稿「唐代の契丹と突厥第二可汗国」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』第八号、二〇〇九年)を参照。

- (31) 幽州北山の戦い、榆関都山の戦い、及び、この二つの戦いの前後の可突于とビルゲ可汗の連繫などについては、拙著註(1)前掲書第2章第4章、拙稿註(2)前掲論文、拙稿註(30)前掲論文参照。

- (32) 唐によるビルゲ可汗の懐柔策については拙著註(1)前掲書第2章第4章、拙稿註(2)前掲論文、唐の渤海対策については、古畑徹「唐渤海紛争の展開と国際情勢」(『集刊東洋学』第五五号、一九八六年)を参照。

- (33) 李過折による可突于謀殺、泥禮による李過折殺害、開元二十三年(七三五)の登利可汗の契丹遠征、泥禮と唐の連繫による突厥軍の撃退など、一連の出来事の経緯や歴史背景については、拙著註(1)前掲書第4章、拙稿註(2)前掲論文、拙稿註(30)前掲論文を参照。

- (34) 突厥第二可汗国の第三代、ビルゲ可汗は、開元二十二年(七三四)、大臣の梅録啜によつて毒殺された(『旧唐書』『新唐書』突厥伝)。梅録啜は、親唐の和平派であり、開元十五年(七二七)、唐に赴いて吐蕃の密書(瓜州挟撃を提案)を献上し、玄宗から絹馬交易の許可を獲得し、唐と和した(註27参照)。だが、ビルゲは唐と和睦後、契丹の可突于を支援し、開元二十年(七三二)～開元二十一年(七三三)、唐と対戦した。梅録啜は、唐との対決を辞さないビルゲに対する反発心から暗殺に及んだと思われるが、唐が可汗の暗殺を梅録啜に教唆した可能性も考えられる。拙著註(1)前掲書一〇一～一〇二頁、一八〇頁、拙稿註(30)論文一二～一三頁参照。

- (35) 平涼偽盟については、佐藤長『古代チベット史研究』下巻(東洋史研究会、一九五九年)、拙著註(1)前掲書第7章「安史の乱以後の内治のための外交」、拙稿「徳宗時代の三つの唐・吐蕃会盟(建中会盟・奉天盟書・平涼偽盟)」—安史の乱後の内治のための外交—(『史窓』第六八号、二〇一一年)を参照。

- (36) 建中会盟、奉天盟書、それに、両会盟の締結前後の唐の国内外の情勢、唐・吐蕃間の外交交渉などについては、拙著註(1)前掲書第7章、拙稿註(35)前掲論文を参照。

- (37) 『唐会要』巻一〇〇大食伝、佐藤註(35)前掲書六五三頁。

- (38) 例えば、会盟が原州の土利樹で行うことに決まった時、左神策軍の馬有麟は、同地が險しく狭いので、吐蕃側が伏兵を置くことを危惧し、平坦な平涼で会盟を行うよう提案した。このため、会盟の地が平涼に変更になった。また、駱元光は渾瑊に同行を拒まれたが、渾瑊の陣地の隣に堅固な陣地を築き、有事に備えた。このため、渾瑊は平涼偽盟で吐蕃軍に襲撃された時、駱元光の陣地に逃げ込んで難を逃れることができた(『旧唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』巻二三二)。

- (39) 佐藤註(35)前掲書六五〇～六五一頁。

- (40) 平涼偽盟の時に捕縛・殺害された唐の使節については、拙著註(1)前掲書三二六～三二九頁、拙稿註(35)前掲論文一五四～一五五頁を参照。